

羽仁もと子の真髓「信仰篇」への誘い

山口陽一

「信仰」は目に見えません。しかし、誰の心にもあります。頼りないものようでありながら何ものよりも強いものでもあります。羽仁もと子は、人が人であるために、自律した自由な人であるために、信仰は欠くことができないと考えました。

「信仰篇」を読むと、彼女が聖書をよく読み、また思索し、それを自分のものにしていくことを知ることができます。植村正久牧師の説教からも影響を受けたであろう深い思索と高い志は、時を越えて「良く生きる」ことを願う人々の糧となっています。

廣瀬薫先生は、牧師として聖書のことばを自分のものとし、人々に届けて生き方を具体的に導く名手です。そこは羽仁もと子とよく似ています。その廣瀬先生が羽仁もと子のテキストを読み解き、その背後にある聖書の教えに遡って絶妙の解説を施し、加えて関連する聖書のテキストを紹介するという行き届いた手引きは、まさに羽仁もと子の「信仰篇」の真髓へと読者を誘ってくれることでしょう。

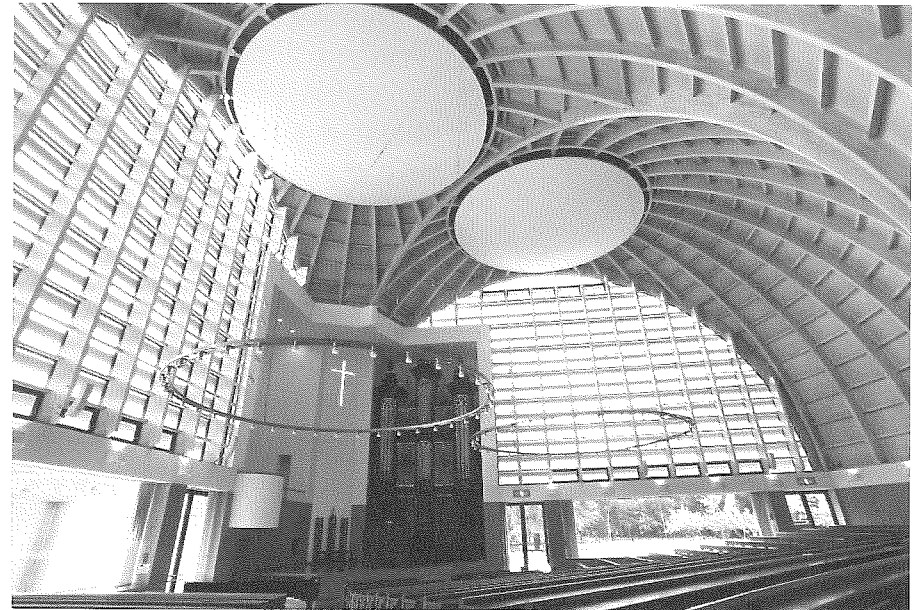
クリスチャンは、教会で牧師の説教を聴くだけでなく、家庭においても日々聖書をひらいて神のことばの糧をいただき、祈りと行動に結びつけるようにしています。そのためのテキストはいろいろありますが、この『良く生きる手がかり』は、かなり高度な部類に属すると思います。言い換えれば「はまる」人、コアなファンが生まれそうな予感がします。聖書を「源」として生きた羽仁もと子のことばからの気づきを読者が記し、聖書に遡って思い巡らし、これを（廣瀬先生曰く）「熱源」として生きる中で、また考える。もう一度読んでみる。そんな方々がたくさん生まれることが期待されます。

真に自由な人は、鍛えられた良心をもっています。その良心を目覚めさせて育てるのが信仰です。その信仰を養う「信仰篇」の手引きが多くの方々に用いられ、「良く生きる」ことが泉のように湧き出て広がって行くことを願ってやみません。

私の祖母と母の書棚には『羽仁もと子著作集』があります。母は嫁ぎ先のわが家がキリスト教の家庭であったため洗礼を受け、やがて先に召された父より遥かに聖書に親しむ生活を続けています。この良き手引きを母にも薦めようと思います。

プロフィール

1958年群馬県吾妻郡に商家の14代目として生まれる。曾祖父が1885年に海老名弾正から受洗、4代目のクリスチャン。金沢大学、東京基督神学校、立教大学大学院に学ぶ。専門は日本キリスト教史。日本同盟基督教団徳丸町キリスト教会、日本基督教団吾妻教会牧師、東京基督神学校校長を経て2011年より東京基督教大学教授・大学院神学研究科委員長。05年より日本同盟基督教団市川福音キリスト教会担任牧師。家族は妻と男の子4人。



東京基督教大学チャペル